(29) 手紙・書翰・信書。信件ともいう。
(30) 訴訟記録。
(31) 孝義貞節の人を表彰するために府州県等が提出した上申書に対して、朝廷や上級官庁が許可した文書。
(32) 欒成顯氏より教示。
(33) 同右。
(34) 欒成顯「竜鳳時期朱元璋経理魚鱗冊考」『中国史研究』一九八八年四期。同（鶴見尚弘訳）「朱元璋によって攅造せられた竜鳳期魚鱗冊について」『東洋学報』七〇巻一・二号　一九八九年。
(35) 欒成顯「明初地主制経済之一考察——兼叙明初的戸帖与黄冊制度——」『東洋学報』六八巻一・二号　一九八七年。同「明初地主積累兼并土地途径初探——以謝能静戸為例——」『中国史研究』一九九〇年三期。
(36) 同右。
(37) 『徽州千年契約文書』前言。
(38) 同右。

ロナルド・スレスキー著
満洲の近代化——解説付参考書目

山根　幸夫

本書の著者スレスキー氏は米国出身の東北近代史の専門家であり、ミシガン大学で修士および博士の学位を獲得している。彼には東北近代史に関する数篇の論稿があり、特に張作霖に関するすぐれた論文を発表している。初め、アリゾナ大学で中国近代史を講義していたが、近代中国を研究するためには、日本へ赴いて研究するのが最も便利であると判断し、助教授のポストを放棄して来日してから二〇余年を経過した。その後、経済的な事情もあって、アメリカの出版・販売会社に就職しながら研究を継続してきた。現在、CCHジャパン・リミテッド社の社長をつとめている。他方、東北近代史に関する研究も依然続けている。

本書も、著者の長い間の研究成果の一つである。原稿が完成したのは随分以前のことになるが、日本国内ではなかなか出版を引き受けてくれる所がなかった。結局、これを引き受けてくれたのが、香港の中文大学出版社で、今般漸

くスレスキー氏の念願がかなったわけであり、わが国の学界に大きく貢献するのみでなく、国際的にも多数の研究者を裨益すること絶大であろう。

スレスキー氏は序文で、東北近代化の略史を要領よく述べると共に、その研究史をも紹介している。なお、満洲という言葉について説明を加え、今世紀の前半においては、中国東北地区を示すのに、英語および日本語で最も一般的な呼称が満洲であった、と断わっている。一八九五年から一九二八年まで、中国人は通常この地域を東三省（奉天、吉林、黒竜江の三省）と呼んでいた。著者は本書目では満洲 (Manchuria) を使用しているが、歴史的な呼称としてこれを用いるのは、咎めだてする必要はあるまい。

さて、本書は五章に分けられているが、その内容目次は次のとおりである。

1. General Works
   - 1.1. Surveys of Modern Chinese History with Reference to Manchuria
   - 1.2. Surveys of Modern Manchurian History and Politics
   - 1.3. Personal Accounts of Manchuria
   - 1.4. Urbanization and Cities in Manchuria
2. Basic Collections of Data
   - 2.1. Yearbooks and Statistical Compilations
   - 2.2. Biographical Dictionaries
   - 2.3. Government Documents and Archives
   - 2.4. Newspapers and Periodicals
3. Civil Affairs
   - 3.1. The Economy and Economic Development
   - 3.2. Agriculture
   - 3.3. Industry, Labor and Wages
   - 3.4. Currency and Finance
   - 3.5. Chinese Imigration
   - 3.6. Education
   - 3.7. Railroads in Manchuria
   - 3.8. Local Gazetteers
4. Military Affairs
   - 4.1. Chang Tso-lin
   - 4.2. Assassination of Chang Tso-lin
   - 4.3. Manchuria and the 1911 Revolution
   - 4.4. Military Affairs
   - 4.5. Bandits and Police
   - 4.6. Chang Hsüeh-liang
5. Diplomatic Events

5.1. Diplomatic Events
5.2. Japan and Manchuria
5.3. The Manchurian Incident
Name Index

以上の内容目次によっても明白なように、著者は近代満洲に関する参考文献を、非常に総合的に、広範囲に而も体系的に収録し、単にそれらの文献の名前を挙げるだけでなく、すこぶる適切な解説を加えている。本書が「解説付き参考書目」と称する所以である。著者は本書に掲げたものだけでなく、それ以外にも多数の近代満洲に関する文献に眼を通している。それらの文献の中で、研究者にとって最も有益な、満洲理解に役立つ文献を選択した結果でき上ったのが本書である。私の尊敬する先輩、市古宙三氏は屢々筆者に、文献目録には簡単でも好いから解説を付加すべきだと強調された。スレスキー氏のこの書目は、市古氏が強調される解説を付加した、理想的な目録といえよう。而も解説は繁簡要を得ており、利用者にどれだけ便宜を提供するかわからないものである。

本書に収められている文献は、すべてで四二一件あるが、著者はそのすべてを閲読して、これこそ参考文献としてふさわしいと判断したもののみを収録したのである。本書を必要に応じて利用するだけの読者にとっては、見逃されるかも知れないが、本書を完成するためにスレスキー氏が払われた苦労と、費やされた日子は筆舌に尽し難いものがある。筆者が想像するのに、出版された本書を手にして、スレスキー氏は快心の笑みをうかべておられるのでなかろうか。実に著者の苦心の作である。

さて、本書一・二、「近代満洲の歴史と政治の概観」の項に掲げられている文献を左に紹介してみよう。それのみでも、著者の意のある処が十分理解できるであろう。

1 Alexander Hosie, Manchuria : Its People, Resources and Recent History. London, 1904
2 吉野作造、満蒙、民友社、一九一六
3 満鉄、Manchuria, Land of Opportunities. N.Y. 1922
4 Esson Third, "Manchuria after Thirty Years." Living Age, 319, 4136 (1923)
5 Adachi Kinnosuke, Manchuria : A Survey. N.Y. 1925
6 園田一亀、東三省の現勢、遠東事情研究会、一九二四
7 園田一亀、東三省の政治と外交、奉天新聞社、一九

二五

8 太宰松三郎、満洲現代史、一九二五

9 満鉄、Report of Progress in Manchuria, 1907—1928, 1929

10 満鉄、Report of Progress in Manchuria to 1930. 1930

11 Dugald Christie, "Manchuria Half a Century Ago and Today" Scottish Geographical Magazine 46 (1930)

12 Owen Lattimore, Manchuria, Cradle of Conflict. N.Y. 1932

13 周志驊編、東三省概論、商務印書館、一九三一

14 Colonel P.T. Etherton & Hessell Tiltman, Manchuria; The Cockpit of Asia. London, 1932

15 松崎省我・渡辺武史、対満支時局三十年誌、新聞評論社、一九三八

16 矢野仁一、満洲近代史、弘文堂、一九四一

17 Robert B. Stauffer, Jr. "Manchuria as a Political Entity: Government and Politics of a Major Region of China, Including Its Relations to China Proper" Unpublished Ph. D. Dissertation, 1954

18 Ronald Suleski. "Manchuria under Chang Tso-lin," Unpublished Ph. D. Dissertation, 1974

19 菊池秋四郎・中島一郎、奉天二十年史、奉天二十年史刊行会、一九二六

20 満鉄、満蒙の大勢——人口耕地及び農産物より見たる、満鉄、一九一九

21 中国科学院吉林省分院歴史研究所・吉林師範大学歴史系編、近代東北人民革命運動史、吉林人民出版社、一九六〇

22 釈宗演、支那巡錫記（釈宗演全書巻九）、平凡社、一九二九

23 西村成雄、中国近代東北地域史研究、法律文化社、一九八四

24 王魁喜、近代東北史、黒竜江人民出版社、一九八四

25 常城、現代東北史、黒竜江教育出版社、一九八六

26 西村成雄、日本における中国近代東北史研究の現状と課題、『東北史研究導報』二、一九八八

27 安藤彦太郎編、近代日本と中国——日中関係史論集、汲古書院、一九八九

右に挙げた近代満洲を概観した二七件の文献を見た場合、著者の視野が如何に広いものであったかがよくわかるであろう。例えば、釈宗演師の『支那巡錫記』巻九の場

合、実際にこれを手にとって、内容を点検してみなければ、此処に参考文献として掲げることはできなかったであろう。著者の用意周到さを示す一例である。而も各件について、最少でも五、六行、長いものでは二〇行にちかい解説が付加されている。例えば、(26)の西村成雄氏の論文については、「『東北史研究導報』は、一九八八年、吉林省と黒竜江省の社会科学院によって中国で開催された学術討論会の成果の報告である。この有益な書誌的論文は、九〇件以上の文献を収め、日本語文献が中心であるけれども、数ヵ国語の文献を収め、解説がなされている」という適切な説明を加えている（英語で約五行）。

三・八、「地方志」の条には、民国年間に編纂された四六件の地方志を掲げている。著者は冒頭につぎのような解説を加えている。「地方志は明、清時代の中国社会を復原するため、学者によって使用されている。然し、中華民国初期の研究のための資料としては、ほとんど放置されたままである。地方の事項を扱った詳細な書物（地方志）を発行する習慣は、清朝が滅亡した後も継続し、知県を含む省単位の官僚は、屢々彼等の姓名を、そのような編纂事業に貸し与えた。二〇世紀における満洲にとって役立つ地方志は、地方官庁の組織、予算、警察、図書館、土地の慣習、人口統計、著名な地方人士のような事項について、有益な知識を提示している。更に、東三省についての相当に好い地方志も利用できる（それらは東三省全体を扱うタイプの地方志である）。著者が東三省全体を扱った地方志として挙げているのは、一・四・六、山田久太郎『満蒙都邑全誌』（支那事情社、一九二六）の類である。

さて、本書で著者が挙げている文献は、前述したように四二一件にのぼるが、そのうち四〇％が日本語文献で、三〇％が中国語文献、残りの三〇％が英文である。但し、英語文献の中には、満鉄が発行したものもかなり含まれている。英語文献の場合、より有用で、興味深いものは採録したが、他方、あまり精確ではない、一九二〇年代にアメリカや英国の雑誌に発表された、満洲についての旅行記のような題名のものは、原則的に除いた、と著者は断わっている。

著者は、若干の特別な出版社については、次のような略称を使用している。まず、格式高い商務印書館によって出版されたすべての図書については、出版社はCommercial Pressと表記し、中国名をローマ字表記していない。次に、大変活動的な南満洲鉄道株式会社によって出版された多数の文献についても、出版者を単にSMRC.と表記している。これはSouth Manchuria Railway Companyの頭字をとったものである。満鉄の編纂した場合、編者名につ

いてもSMRC.を使用している。本書の中に頻出する満鉄と商務印書館について、この略号を使用したことは、きわめて適切な措置であったと言えよう。

比較的最近に出版された文献については、一々その所在を注記していないが、簡単に閲覧しにくい数の少い文献については、各件ごとにその収蔵図書館を明記している。日本の図書館として挙げられているのは、国立国会図書館と東洋文庫の二ヵ所である。つぎに、著者の挙げている図書館（略号）を示しておく。

ハーバード東アジア図書館（ハーバード大学）（HAR）
フーバー研究所図書館、東アジア・コレクション（HOV）
米国議会図書館、（LC）
ミシガン大学アジア図書館（MICH）
国立国会図書館・東京（NDL）
スレスキー・コレクション（SC、著者が入手した図書は、屢々ゼロックス・コピーで、通常図書館のコレクションでは利用できないものがある）
ロンドン大学アジア・アフリカ学校図書館（SOAS）
東洋文庫（TYB）
メリーランド大学（UM）
ワシントン大学（UW）

右の如く、著者の挙げた図書館、大学が主として米国のものに限られているのは、著者が本書の利用者として、主として米国の研究者を想定された結果であろう。なお、スレスキー氏は本書を著述するに当って、利用した図書館として、ミシガン大学アジア図書館、東洋文庫、ロンドン大学アジア・アフリカ学校図書館、国立国会図書館、メリーランド大学アジアコレクション等を挙げている。日本で特に国立国会図書館と東洋文庫を挙げたのは、一般の研究者にとって最も利用しやすい図書館と考えたからであろう。

巻末に、著者は人物索引を付しているが、此処に載せられている人物は、歴史的人物と著者との二種類になる。歴史的人物としては、張作霖の名前が最も多く出てくるのは当然であろう。張学良も比較的多い方である。著者（編者）として、最も多く出てくるのはSMRC（南満洲鉄道株式会社）である。人物索引を一覧することによって、私たちは近代満洲史の研究を展望することができるであろう。

以上の紹介によって、本書の大要はほぼ判明したであろう。二〇世紀前半における満洲研究の文献目録として、本書はきわめて精緻な、そして重要文献をすべて網羅した貴重な文献目録である。今後、近代満洲を研究しようとする

者にとっては、必ず最初に参考にしなければならぬ文献である。重複になるかも知れないが、筆者はこの貴重な文献目録を完成されたスレスキー氏に対して、心よりの讃辞を呈したい。本書は、著者のこれまでの近代東北研究のすべての成果を集約したものである。なお、筆者がスレスキー氏に望みたいことは、現在の社長としての仕事が非常に多忙なことはよくわかっているが、近代東北史の研究をも継続していただきたいということである。

(Ronald Suleski: *The Modernization of Manchuria: An Annotated Bibligraphy.* The Chinese University Press, Hong Kong, 1994. 208p.)

徐　勇著
征服之夢——日本侵略戦略

山根　幸夫

先般〈抗日戦争史〉叢書の一冊として、徐勇『征服の夢—日本侵華戦略』が刊行された。この叢書は編集委員会(主編王桧林、副主編江淳、侯祥祥他)と広西師範大学出版社、および多数の抗日戦争史研究の専家・学者の協力の下に、次々と刊行される予定である。続刊される予定のものには、楊奎松『失われた機会—戦時国共談判実録』、唐宝林『深谷幽蘭—戦時「国母」風禾』、解学詩『歴史の毒瘤—偽満政権の興亡』、蔡徳金『歴史の怪胎—汪精衛国民政府』、林治波『抗戦軍人の魂—張自忠将軍伝』、任貴祥『華夏の向心力—華僑の祖国抗戦に対する支援』、王眞『動蕩中の同盟—抗戦時期の中ソ関係』等が挙げられている。

このような叢書の刊行が計画されたのは、中日戦争史の研究を推進し、「実事求是」の立場から広大な読者に対して、中国民族が日本軍の侵略に抵抗した全貌を紹介し、歴史の事実を以て、国民に愛国主義教育を施すためであると